

『第8回(仮称)「漱石山房」記念館整備検討会』の報告

3月10日(日)午前、榎町地域センターにおいて、第8回検討会を開催しました。最終回となる本検討会は、半藤末利子特別委員、26名の検討委員のうち25名に加え、中山弘子新宿区長が参加し、行われました。

事務局から、前回検討会での指摘を踏まえた修正箇所を報告を行った後、中島国彦座長から中山区長に、整備基本計画案が提出されました。



中山区長あいさつ

本日、整備基本計画案をいただき、とてもうれしく思っている。この計画案をしっかりと受け止め、平成29年2月の漱石生誕百五十周年に向け、努力をしていきたい。

ここは夏目漱石の終焉の地であり、代表作といわれる数々の名作を書いたところでもある。そうした「土地の記憶」をみんなで共有できる、併せて漱石初の本格的な記念館としての役割を果たせるように、文学館としての機能も核に置く、また、全国から、そして地域の皆さんに何度もお出でいただける、開かれた記念館となるよう、大学や民間企業などにつながる活動を行うていきたい。

今後、基金をはじめ地道な活動を粘り強く進め、成果につなげたい。これからも皆さま方の大きな応援としての役割を期待し、お願いしたい。みなさん、本当にありがとうございます。

半藤末利子特別委員あいさつ

リピーターが訪れてくれるか心配している。ハコモノ化させないためには、地域と密着した記念館にならないといけないと思う。これからの人たちは、参加型のイベントが親しみやすいので、講演などのイベントと併せて、充実させてほしい。

また、区の財政状況にもよるが、建設費や資料購入費も、しっかりと準備してほしい。全国から寄付などのご支援を得られると、意義のある記念館になると思うし、そんなことを望んでいる。

検討会をふりかえって

各検討委員から、検討会の感想や意見、要望などを発表しました。

- ・地域でも、記念館の来館者に対して、「なるほど、漱石が住んだまちだな」と思ってもらえるような対応ができるとうい。
- ・時代の空気を取り入れて、進化し続ける漱石山房記念館を作っていたきたい。
- ・地域貢献が大事で、地域にいい影響を与えられる建物を目指す。建築を通して、明治を継承する意思を表現すべき。
- ・本格的な文学館でありながら、地域の拠点として親しまれ、子どもたちの歓声が聞こえる文学館にしてほしい。
- ・設置者の覚悟も必要だが、利用者にも、記念館というコミュニティをつくる仲間であるという意識が育っていくべき。ミュージアムコミュニケーションが図られるコミュニティミュージアムとして、人とつながっていくてほしい。
- ・漱石の言葉を次の世代にどう伝えていくかを重視し、子どもたちが漱石作品に触れる手助けをする。



漱石といえば、「猫」のイメージが強いので、猫を活用するとういのではないか。

「中川副座長」ベランダに置いた藤椅子に座ってくつろぐ漱石の写真のように、漱石の人生がにじみ出るような空気感を持った空間を作り出すことが大事。誰でも利用でき、特別がなくなってもみんなが集まってくる場とする。

また、新宿区は、多くの文学者や芸術家が暮らしたまちなので、これまでの旧宅保存などの取り組みをネットワーク化し、地域の文化として発信すべき。

「中島座長」漱石の初版本はきれいな装丁で、とてもインパクトがある。初版本の展示などにより、実物のリアルな感じを受け止めてほしい。

また、オープンな書棚があり、勉強したい人たちが気軽に研究書を読める空間を実現してほしい。これからも、めざす姿の四箇条を思い出しながら、実現に向け、それぞれの分野において夢を語ってほしい。

記念講演

「漱石山房」をめぐる記憶の風景 石崎等委員

漱石の次男・伸六の友人・鷲尾洋三、夏目家に猫を預けに来た澁川家の書生・片倉勇作による漱石や「漱石山房」に関する記述を紹介。明治16年頃の牛込界隈の地図を交えて、当時の様子について解説が行われました。

